

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 和田忠彦

学位申請者 越前 貴美子

論文名 「ロゼッタ・ロイにおける記憶と語り」

結論

越前貴美子氏から提出された博士学位請求論文「ロゼッタ・ロイにおける記憶と語り」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は、和田忠彦を主査に、副査として、美学・イタリア美術史を基点に広範な研究執筆活動を精力的に展開し、吉田秀和賞、読売文学賞をはじめ社会的にも高い評価を受けているイタリア研究者、岡田温司京都大学大学院人間・環境学研究科教授を学外からお迎えし、学内からは関口時正、松浦寿夫、博多かおるの三氏を加えた5名で構成された。

論文の概要

本論文の主眼は、イタリア人作家ロゼッタ・ロイ Rosetta Roy (1931-)が今日まで30有余年の創作活動において生み出した小説作品を中心とするテキスト群における「記憶」の表象の様態と「語り」の手法をめぐる考察にある。

小説第一作『自転車』(1974)以来、全作品に通底する語りの特徴を主題と文体により類型化したのち、それらが「記憶」、とりわけ第二次世界大戦の記憶に関わる記述において、どのように変奏され、視覚的に現前化されるのかを、4章にわたり詳細かつ精緻にテキストに沿って分析している。

以下、論文の構成に沿って概要を述べる。

第1章では、作家の幼年期に形成された家族の日常にまつわる記憶に、ローマにおける戦時中の出来事がどのように縊り合わせられ語られているのかについて、小説第一作『自転車』の冒頭を例に、文法上の破格（動詞、句読点、接続詞の省略など）あるいはジェルンディオ等名詞化の多用によって、回想がリアリティを獲得するという、作家固有の語り的手法がまず提示される。そのうえで、保守的カトリシズムになじんだ家庭環境に育った作家が、ユダヤ人迫害の歴史的記憶を、「非体験者」として自伝的記憶のなかに織り込み小説化するという選択へとむかった背景に、罪の意識があったという推論がなされ、以降の章において、この推論を「記憶の分有化」の可能性をめぐる問題設定に拠って検証することが述べられる。

第2章では、迫害の「体験者」である作家プリーモ・レーヴィと「非体験者」ロイとの比較をとおして、証言や歴史的記述と文学的叙述の差異、体験を語ることの根源的な意味、非体験者に体験を伝えることの可能性と不可能性、体験を語るために必要な虚構、体験者が語ることの困難などについて考察したのち、「非体験者」として語ることの妥当性と分有可能性が論じられる。ロイの語りにおいて、個人的記憶と(ユダヤ人の歴史を含む)集団的記憶の重なり合いは、一見戦争とは無縁の、作家の幼少期における体験との比較照合により、その由来と様態が明らかになることが指摘される。

第3章では、ロイによって表象された二様の記憶について、「読者」の視点を導入することにより、記憶の記述に生じる微細な「ゆがみ」がもたらす読者にたいする「違和感」こそ、「非体験者」による分有可能性の証左であるとの分析がなされる。主たる分析対象となるテキストは、『水の門』と『ハンセルマンのホットチョコレート』であるが、論者は、このふたつの小説を特徴づける寓意性や推理小説的構成と手法に、読者にたいし開かれた読みの可能性の示唆と、他者の記憶への「参加」の誘いを看取したうえで、こうした手法に則って読者に提示される記憶の表象を「記憶の風景」と名づけ、さらなる分析を加える。

「記憶の風景」とは、つねに現在に投影され過去にならない過去、「行き場のない過去」の謂であり、ゆがみと痛みをともなったみずからの個人的記憶を読者に差し出すことによって、集団的記憶の暗部にどこまでも寄りそう姿勢をしめそうとした作家ロイの決断の反映であると、論者は指摘する。

最終章第4章では、ロイの思想的変遷が比較的近年に発表された3つのテキストを参照しつつ概観される。『ハンセルマンのホットチョコレート』(1995)については、「罪」と「赦し」の主題に焦点をあて、「非体験者」にとって、「哀れみ」ではなく「正義」に基づいて思索することの肝要をロイが主張している点を指摘する。カトリック権力との軋轢にもつながったこの主張は、ついで『ユダヤという言葉』(1997)において、さらに激しさを増し、教会だけでなく、みずからをもふくむ家族への弾劾となって展開されることが確認される。そして最新作『思い出の樹は黒く、空は青い』(2004)において、ロイがこれまでにみられなかった新たな語り的手法を採り、主題的にもユダヤ人問題からも、自伝的世界からも離れたという事実をもって、作家の思想的変遷の幸福な帰結であると位置づける。それは作家ロイの記憶の表象にたいする姿勢の決定的変化であるとする論者は、その傍証として、小説の表題がシルヴィア・プラスの詩(「月といちいの樹」(詩集『アリエル』所収)の一節から採られているという興味深い事実を挙げ、本論は閉じられる。

以上、第1章において提起された、「記憶の分有化」の可能性をめぐる問題設定に拠って検証が進められた本論文は、つづく3章にわたる分析をとおして、作家ロゼッタ・ロイによる記憶の表象が30有余年に生み出された小説テキストという虚構世界において、どのような語り的手法が採択され、個と集団という記憶と時間の枠組にあらたなリアリティが附与されたのかを、きわめて説得的かつ精緻に論じた労作であるといえる。

審査の概要及び評価

高い評価を与えられる点は以下の二点である。①日本において最初のロゼッタ・ロイに関するモノグラフィである点（そもそも、イタリア 20 世紀文学を対象にした学位論文の事例は、まだ極めて少数（1980 年代末に 2 件、Pirandello と Malerba、そして本学において 2006 年に 1 件）にとどまり、国外においても、雑誌論文を除けば、貧弱きわまりない）。とりわけ共和国誕生以後の作家のなかでも、「孤高」もしくは「屹立した」と形容されるきわめて特異な作家の小説作品を、《第二次世界大戦の記憶と語り》という視点にたって緻密に分析した論文である点。②テキストの構造や修辞分析（とくに第 2 章「体験者の語りと非体験者の語り」第 2 節「非体験者の語り」、および第 3 章「記憶に書き込まれた歪み」）に際してしめされる細やかな身ぶりが、論者の研究経験を考慮に入れると、およそ経験値をはるかに超えた精確さを裏付けに持つ説得的かつ鋭利な読解を実証している点。

各審査委員より疑問もしくは批判として指摘のあった改善の余地のある点は以下の諸点に集約できる。①『ハンセルマンのホットチョコレート』の分析が十分なテキスト分析には至らず、詳細な内容紹介にとどまっているが、これは筆者の物語論的方法論に関する探究の不十分さを反映していると考えられる。②《記憶》《物語》《歴史》といった概念について、美学的・哲学的研究の現況をふまえれば、十分とは言い難い論理展開と記述が散見される。結果として、時として時系列をなぞった記述に終始している箇所が生じている。③Primo Levi vs Rosetta Roy —この二項図式の有効性を活かすためには、《体験》の有無のみに依るのではなく、《体験》をめぐる《語りの様態》そのものに焦点を当てた表象論的分析が必要であろう。

だが以上の三点は、この論文がまさにテキストとして読み手を十二分に刺激するものであり、その先駆性に触発された今後の課題にむけた提言であり、成し遂げられた成果の学術性を否定するものというより、論者の力量を高く評価するからこそ生じた批判であることは言うまでもない。また、こうした疑問や批判点にたいする口述試問での応答は、指摘のあった諸点をあらかじめ自覚していたと判断されるきわめて適切なものであった。よって審査委員会は全員一致して冒頭に述べた結論に達した次第である。